

校報

編集・発行
國學院大學久我山
中学高等学校
校報編集委員会
杉並区久我山1の9の1
電話 (3334) 1151 (代)

《5月行事予定》

- 1日 國學院大學
神殿鎮座94年祭
- 2日 校内整備の日
- 3日 憲法記念日
- 4日 みどりの日
- 5日 こどもの日
- 9日 吹奏楽部第45回定期演奏会
(中野ZEROホール)
- 10日 (高)3年全統記述模試①
(高)1・2年全統模試
- 11日 オープンキャンパス・
入試報告会①(受験生対象)
- 17~21日 (中高)中間試験
- 17~18日 教職員健康診断
- 24~27日 (高男)1年研修会
(中女)1年自然体験教室
- 27~30日 (高女)1年研修会
(中男)1年自然体験教室
- 31~6月3日 (中男)1年自然体験教室

令和6年度國學院大學久我山高等学校入学式式辞

校長 國清 英明

思い出を胸に、中学校を卒業した諸君が、新たな学びの道歩み始める、この晴れの日。ご来賓の方々や、保護者の皆様と一堂に会して入学式を挙行できますことは、校長として大きな喜びです。

改めて、四〇九名の新入生諸君、またご列席の保護者の皆様、ご入学おめでとうございます。ご臨席を賜った学校法人國學院大學理事長・

佐柳正三先生を始め、来賓の方々、また参列している生徒会代表の諸君とともに、教職員一同、心からお祝い申し上げます。今日から久我山での高校生活が始まります。これからの三年間で、諸君が精神的に大きく成長し、主体的で自立した青年となってくれることを願ってやみません。

さて、入学式にあたり、本校がたどってきた歴史についてお話しします。本校は太平洋戦争も

「学園三蔵」という三つの教育方針を掲げて、当時の岩崎通信機社長・岩崎清一先生が創立

されました。

戦後復興を担う若者の育成を志して、産声を上げた学園でした。しかし、終戦直後の混乱の中、学校運営は困難を極め、教職員の苦労は察するに余りあるものだったと聞いております。しかし昭和二十七年、建学の精神が一致することから國學院大學との合併を果たします。これを転機として、学園は数々の困難を乗り越えて歩み続け、昨年の秋には創立七九周年を迎えることができました。

学園の法人母体である國學院大學は、昨年創立二四二周年を迎えた、歴史と伝統を誇る大学です。その前身は、明治一五年に設立された皇典講

究所です。その中に設けられた教育機関である私立國學院は、明治三六年の専門学校令で認可されました。なお、こ

の時認可された東京の学校は、現在の慈恵会医科、早稲田、慶應義塾、法政、専修、東洋の各大学、そして國學院大學と同じく、皇典講究所を前身とする日本大学です。

國學院大學はいま、「知の創造。日本をみつめ、未来をひらく」という将来像を掲げ、「問い直す」「学び合う」「共に生きる」を教育目標と定めています。人間は同じ事柄に接しても、受け止め方はそれぞれ異なるものです。そうした違いを知ることが、人と人との絆の大切さを学んだり、自らの価値観を問い直すきっかけとなります。本校も大学とともに、他者との交流を通して、互いに学び合う場となることを目指しています。

アメリカの国際政治学者サミュエル・ハンティントンがわが国を、自国のみで成立す

る、独自の文明を持つ国、と位置づけました。本校は創立以来、往古より受け継がれてきた、特色ある日本の伝統文化や、調和を重んじる心を大切にしてきました。君たちもその気風を受け継ぎ、身の回りの自然・物・人に対する感謝の念を忘れないでください。そして人それぞれの性格や心情を理解し、思いやりの心を持った人に育ってくれることを願っています。

互いの個性を認め合い、他人のために尽くす利他的心を持つことによつて、誰もが社会と共生することができます。君たちが利他的心を身につけることで、多様性に富む国際社会の中で活躍することができます。前途有為な若者となることを期待します。

さて、現在わたしたちは、インターネットを検索すれば、手軽に情報を入手できる時代に生きています。しかし、そのすべてが正確な内容とは限りません。SNSへの不適切な書き込みが、災害時に救助活動の妨げとなったことも、記憶に新しいところです。ネット上にあふれる情報の真偽を見極めるのは、容易なことではありません。しかしそれを吟味し、適切に対応することの必要性は、ますます

高まっていくことでしょう。そうした際に掘りどころとなるのは、確かな学びを通して積み上げてきた、揺るぎない知識や経験なのです。

昨今、ChatGPTなど、生成AIの著しい進歩は、世界を大きく変えつつあります。このような時代に、わたしたちに求められるのは、他者の感情を理解する力、あるいは新たな発想や感性、未知なるものへの好奇心や興味など、未だAIも及ばない、人間ならではの資質を育んでいくことです。本校の教育が目指すところも、そこにあります。

最後に、本校は教科の学習と同様に、部活動を通して精神を鍛え、友人関係を構築することも、人間として成長する上での要諦であると考えています。江戸時代の陽明学者・中江藤樹は、文と武が不可分であることを「文武一徳」と表現しました。本校での学びの二つの側面である、授業での学習と課外活動を通して自身の人格を磨き、高めていくべきです。

君たちが成人年齢に達する三年後、遅く成長し、頼もしい青年となつて巣立っていくことを、心より期待しています。以上、式辞といたします。